しらさぎ

求めて学ぶ　考えて行う　自ら鍛える

目黒区立第八中学校
学校だより NO.１５
（通巻115号）
平成２８年（2016）
９月１５日（木）

『これからの社会に求められる能力』と『授業改善プラン』

校長　飯野　博史

前期期末考査が終了し、答案を返却しています。得点に一喜一憂することなく、結果を今後の学習に生かしていってほしいと思います。

４月に区の学力調査を行いました。また、３年生は全国学力調査、２年生は都学力調査も行いました。それらの結果を分析し、「授業改善プラン」を作成しました。不断に授業を工夫・改善し、さらに学力の定着・向上に努めていきます。

「授業改善プラン」を作成するにあたり、今の中学生が社会人となって活躍する社会にはどんな力が求められているのかを考えてみました。

■これからの社会

社会の変化はますます激しく、複雑化していきます。グローバル化、少子高齢化、情報化、知識基盤社会化がますます進展していくことでしょう。

「２０１１年度にアメリカの小学校に入学した子供たちの６５％は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」（2011ニューヨークタイムズ紙）と言われているように、機械化がさらに進み、ロボットや人工知能が人間の仕事の大半をこなすようになるのではないでしょうか。

型の決まった反復系の手作業はもちろん、反復系の認識を伴う仕事までが減少していきます。反対に、非反復系で分析を伴うもの、非反復系で双方向性を必要とするものが増えていくと予想されています。つまり、機械ではできないこと、人間でなければできないものが必要となってくるのです。

■求められる力

機械ではできないこと、人間に求められる能力とはどんな力でしょうか。じっくりと考えること、どれが適切かを判断し決断することなど思考を伴うもの、他者と話し合ったり情報交換をしたりして新しいアイデアを生み出し創造すること、折り合いを付け一致点を探ることなどが考えられます。つまり、単に知識を暗記し再生していればよいのではなく、論理的に考えたり他者に分かりやすく表現したりする実社会で活用できる資質・能力が求められています。

参考までに、内閣府では21世紀の社会に求められる能力を「人間力」とし、次のように説明しています。

「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」

①「基礎学力（主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力）」「専門的な知識・ノウハウ」を持ち、自らそれを継続的に高めていく力。また、それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」「創造力」などの知的能力的要素

②「コミュニケーションスキル」「リーダーシップ」「公共心」「規範意識」や「他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高めあう力」などの社会・対人関係的要素

③これらの要素を十分に発揮するための「意欲」「忍耐力」や「自分らしい生き方や成功を追求する力」などの自己制御的要素

■授業改善の視点

では、これらの力を、目の前の子供たちに身に付けさせていくにはどうしたらよいのでしょうか。そこで今盛んに言われているのが「アクティブ・ラーニング」です。「アクティブ・ラーニング」の意義については次のように説明されています。

> …そのために必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・能動的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。こうした学習・指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、また、子供たちの学習意欲を高める上でも効果的であることが、これまでの実践の成果から指摘されています。

このように、子供が自ら学び、ともに学ぶ「アクティブ・ラーニング」が、「確かな学力」を身に付ける上で有効だとしています。そして「アクティブ・ラーニング」の具体的な進め方として次のような学習方法をあげています。

> …発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

八中では、校内研修会で講師の先生を招き「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業」について理解を深めました。「授業改善プラン」作成にあたって「アクティブ・ラーニング」の視点も盛り込んでいくことにしました。「アクティブ・ラーニング」に教科はもちろん、道徳、特別活動、総合的な学習の時間など、学校全体で組織的に取り組んでいく必要があります。「アクティブ・ラーニング」についてはさらに研修を深めていきます。

■組織的な授業改善

「授業改善」は喫緊の課題ですが、ある一人の先生がいい授業をしてもそれが全体に広がって成果を上げていかなくては意味がありません。一人一人の授業の良さを全教員で共有し、学校全体で組織として授業を改善していくことが必要です。

八中では教員同士でお互いの授業を見合うようにしています。また、３年前から全教科で、「学習カード（振り返りシート）」に取り組んでいます。授業を通して「分かったこと」「分からなかったこと」「できるようになったこと」などを振り返り、「学習カード（振り返りシート）」に記録しています。授業改善につながり、少しずつですが成果を上げつつあります。今年度からは「生徒による授業評価」も取り入れ、授業者が自らの指導について客観的に振り返る資料として活用しています。

さらにＩＣＴの活用にも力を入れています。各教室に備え付けられたパソコン、プロジェクタを活用し、生徒の興味・関心のある教材を提示し、学力が定着するように努めています。

学校では「楽しく分かる授業」を目指していきますが、「家庭学習の習慣化」も大切です。ぜひご家庭でも、今回の前期期末考査の反省をもとに、学習方法や学習時間について話し合ってみてください。

※ 以下の資料を参考にしました

- 中央教育審議会教育課程企画特別部会　論点整理（平成27年8月）
- 『学校運営（2016.6月号）特集 授業を磨く～授業改善に向けて～』（学校運営研究会）
- 『授業を磨く』田村 学著（東洋館出版社）　など

『授業改善プラン』は【八中ホームページ → トップページ → 授業改善プラン】からもご覧になることができます。